

〈実践報告〉

## 板橋宿の歴史を学ぶオンライン授業の実践例

—2020コロナ禍での大学教育の記録—

遠藤 ゆり子

### 要約

本稿は、2020年度の前学期、コロナ禍で急遽実施されたオンライン授業の実践例を記録したものである。本授業は、アクティブラーニングを多用して、江戸時代における中山道の宿場町、板橋宿の歴史を学ぼうとするものであった。しかし、外出自粛が求められ、予定していた文書調査や現地の巡見を実施することができなくなった。そのようななかで、Google Earthを使ったバーチャル・フィールドワークを試み、WEB授業でグループワークを行うなど、オンラインでのアクティブラーニングの方法を模索してきた。全15回の授業を振り返ることで、オンライン授業のメリットとデメリットも整理した。また、学生による研究の成果も一部紹介し、授業の教育的効果についても検討を加えた。今後は、オンライン授業の長所を踏まえ、さまざまな手法を取り入れつつ、より良い授業作りに努め、ここでの成果を活かしていきたいと考える。

### キーワード

板橋宿 オンライン授業 コロナ禍 バーチャル・フィールドワーク アクティブラーニング

### はじめに

本稿は、急遽コロナ禍でオンラインにて実施することとなった、淑徳大学人文学部歴史学科の2020年度前学期の授業「日本地域史」について報告しようとするものである。同授業は、本学部が所在する板橋区の歴史を学ぶことを通して、歴史学の手法を身につけ、歴史学を学ぶ意義について考えることを目的としている。本年度で、開講してから4年目を迎える。当初は昨年度の成果を引き継ぎ、近世の板橋宿で旅籠屋をしていた伊勢屋孫兵衛家(屋号は伊勢孫)に伝来する「伊勢孫文書」(板橋区郷土資料館所蔵)を主に調査、分析することを予定していた。

しかし、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大にともない、本学もオンライン授業に移行せざるを得なくなった。予定していた旧板橋宿地域の巡見や文書調査も中止する事態に見舞われた。今でこそ、本学部もある程度はオンライン授業のためのシステムが整いつつあるが、当初はかなり不十分な体制であったことは否めない。筆者自身も知識に乏しいなか、まさに手探りの状態で、オンラインにて

えんどう ゆりこ：淑徳大学 人文学部 教授

アクティブラーニングを主とする授業を作り出していくことが急ぎ求められた。本稿は、そのような状況下で実施された一授業の実践報告である。

すでに、コロナ禍でのオンライン授業の方法については、教育機関や学問分野を超え、教員が互いに授業のスキルアップを目指す場等で多く報告されており、盛んに情報交換も行われている。しかし、ある単元のみではなく全15回の授業全体を通して、本年度の授業に特徴的な工夫とその効果等を見つめ直し、「記録」として残しておくことは、後にコロナ禍の大学教育について振り替える際に、何らかの歴史的意義をもつのではないかと思われる。そのような認識のもと、授業内容を紹介するとともに若干の考察を加えていきたい。

## 1 コロナ禍の授業対応

ここではまず、本授業の履修者について説明した上で、時系列的にコロナ禍における授業への対応状況を整理しておきたい。なお、授業への対応状況とは、本学および本学部、または本学部のある東京キャンパスによる対応と、それにともなう本授業への筆者の対応のことである。

### (1) 本授業の履修学生

本授業を履修できるのは、人文学部の2年次生から4年次生である。だが、実際の履修者は全て歴史学科の学生であり、2・3年次生が中心である。本年度は、3年次生が14名、2年次生が48名、合計で62名が履修した。

### (2) 3月末から4月上旬における対応

本学人文学部の2020年度前学期授業は、当初は4月6日から実施される予定だった。しかし、COVID-19の感染拡大にともない、本学部がある東京キャンパスとして、授業開始時期は2週間後ろ倒しにし、4月20日の授業開始へ変更されることが3月24日に発表された。同時に、アクティブラーニング、グループ学習など他者と接触する授業方法を控えることも要請された。

さらに、4月3日には対面授業の開始日が5月11日になること、そのため当面の間は遠隔にて授業を行うことが通達された。4月10日には、第1～3週(不登校期間)を対象とする、課題研究等を活用した授業の実施方法について説明がなされた。具体的には、S-Naviという掲示配信機能を使って、教員から履修学生へ課題を掲示する授業の説明であった。同システムでは、3MBまでのサイズの添付資料を1度に5ファイルまで配信可能である。この機能を使ってWord、Excel、PDFのファイルを履修者に向けて配付し、学生はレポートを提出することとされた。レポートの提出方法については、この段階では対面授業の再開も予定されており、その際の受け取りも含めて指定されてはいなかった。

またこれ以外の授業方法は、履修者全員の学習環境を考慮し、履修者の授業参加を証明できる限りにおいては、教員の判断によって変更して実施することを妨げないとされた。なお、これらの対応によって生じた変更点等は、授業内に履修者へ説明することも求められた。

当初、本年度の「日本地域史」では、次のような授業計画を立てていた。

#### 【当初予定していた授業スケジュール】

- |        |                                 |
|--------|---------------------------------|
| 第1回目   | 板橋区の歴史(講義形式)                    |
| 第2回目   | 板橋宿の歴史(講義形式)                    |
| 第3・4回目 | 板橋宿を歩く(現地におけるフィールドワーク授業)        |
| 第5・6回目 | 「伊勢孫文書」の閲覧・撮影(板橋区郷土資料館における文書調査) |

- 第7～12回目 文書の翻刻・分析による報告書作り(グループワーク)
- 第13・14回目 グループ発表(PowerPointを使ったプレゼンテーション)
- 第15回目 各グループによる研究成果の共有(報告書の提出)

一連の通達により、シラバスは大幅に変更せざるを得なくなり、前年度に依頼していた調査先へも調査中止の連絡を行うこととなった。第1～3週のみ遠隔授業という方針の下、この段階で改訂した授業のスケジュールは次の通りである。

【4月に変更した授業スケジュール】

第1回目	ガイダンス(大幅な授業内容の変更について説明、遠隔授業)	4月22日
第2・3回目	板橋と板橋宿の歴史を学ぶ(遠隔授業)	4月29日
第4回目	バーチャル・フィールドワーク「板橋宿を歩く」(対面授業)	5月6日
第5回目	史料収集調査について学ぶ(対面授業)	5月13日
第6回目	報告書(レポート)の書き方について学ぶ(対面授業)	5月27日
第7・8回目	古文書の読解(対面授業)	6月3日、6月10日
第9・10回目	古文書史料の分析(対面授業)	6月17日、6月24日
第11・12回目	報告書の作成(対面授業)	7月1日、7月8日
第13回目	ポスター発表の準備(対面授業)	7月15日
第14回目	ポスター発表(対面授業)	7月22日
第15回目	ふりかえり(対面授業)	7月29日

4月22日に実施した第1回目の授業は、S-Naviの掲示配信機能を使用して課題を提示し、板橋宿跡の巡見、板橋区郷土資料館での文書調査が中止になったことを説明した。

(3) 4月下旬から5月上旬の対応

4月下旬になってもCOVID-19の感染拡大は続き、外出そのものが憚られる状態となっていた。都市部を中心に、前学期の授業すべてをオンラインとする方針を打ち出す大学も増えていった。そのようななか4月27日には、本学でも当面の間は対面授業の開始時期を遅らせることが発表された<sup>1</sup>。

対面授業時におけるレポートの受け取りが難しくなったため、S-Navi機能の一つであるクラスプロフィール(学生からの提出物受け取り機能をもつシステム)やGoogleフォームの利用について、本学の教務担当委員会から案内があった。翌日の28日には教務担当から、第4回目(5月11日以降)の授業までに全教員・全学生にGoogleアカウントが付与され、Google教育系ツールを使用できることも報告された。なおこの段階までは、本キャンパスの専任教員のみGoogleアカウントが付与されていた<sup>2</sup>。

5月8日には、全教員・全学生へのGoogleアカウント付与が完了したとの連絡を受けた。これにともない、教育系ツールのGoogle Classroomを使用することが可能となった。本授業においてもClassroomを開設し、学生へ参加を促した。ただ、全学生をClassroomに参加させるのは、なかなか容易ではなかった。後述するZoomミーティング機能を利用したリアルタイムのWEB授業にて、画面共有をしつつ説明を加え、それでも難しい学生には個別に対応することで、ようやく全学生が参加できた。それまでの間は、Google ClassroomとS-Naviのクラスプロフィールを併用し、Classroomに参加できない学生に対応することとした。5月14日には、教務担当事務からも、教員向けおよび学生向けにGoogle Classroomのマニュアルが配付され、本キャンパスでは6月12日までという期間限定でヘルプデスクが開設された。

Classroomの開設により、配付資料のデータ量と種類に関する制限という問題は解消され、学生からの課題の提出先は選択肢が1つ増えることとなった<sup>3</sup>。本授業では、授業連絡や資料の配付、課題提出は

全てGoogle Classroomに統一することとした。それにより、第4回目授業に予定していたバーチャル・フィールドワーク(後述)は、スライドの配信によって実施することができた。また、対面授業がしばらく延期されることとなったため、第4回目からは学生からの要望も多かったWEB授業を行うこととし<sup>4</sup>、ツールとしてはオンラインでもグループワークが可能なZoomミーティングを利用した<sup>5</sup>。最終的には、前節で示した【4月に変更した授業スケジュール】の第4回目から第15回目に予定していた「対面授業」が、全て「WEB授業」となった。

また、第7～10回目の授業に予定していた未翻刻の古文書を読解し、分析する課題については、新たに史料調査をすることが困難だったため、既に翻刻済みの史料を使用し、所謂くずし字を読み、古文書を読解力と分析する力を身に付ける内容に変更することとした。

## 2 本年度に特徴的な授業形態

### (1) 課題提示型(文献の読解)

第1～3回目に実施した授業形態である。ここでは授業内容を紹介するとともに、その教育的効果についても考えてみたい。

第1回目は授業内容について説明したほか、次の課題を提示した。

- ① 配付資料4点を読む(『日本歴史地名大系 東京都』(平凡社、Japanknowledge)掲載の「中山道」「板橋宿」の説明文、『国史大事典』(吉川弘文館、Japanknowledge)掲載の「本陣」「飯盛女」の説明文)。
- ② CiNii Articlesで拙稿「板橋宿の研究動向とフィールドワーク授業の実践例」(『研究論集』第4号、2019年)を検索し、「機関リポジトリ」へアクセスの上、論文をダウンロードして読む。
- ③ ①・②の内容を踏まえて、「板橋宿の特色」を説明する(400字程度)。
- ④ 特に注目したいと思った板橋宿の歴史的事象(できごと、人物、職業など)をあげ、それに注目したい理由を説明する(400字程度)。

これらを通して、板橋宿に関する基礎的知識を得て、地域の歴史を調べる際に使える辞典の存在も知ることもできたと思われる。また、2年次生のなかにはCiNiiのサイトを利用したことがない学生もおり、そのような学生が論文検索の方法を身に付ける機会にもなったと考える。ただ、なかにはほぼ文献を書き写しただけのレポートを提出する者もいた。もっとも、後にわかったことだが、既にこの頃には学生の授業課題が膨大となっており、本課題に対応できなくなっていたという事情もあった。だが、アクティブラーニングを主とするといった履修前の説明(シラバス)とは、大きく異なる授業になったことへの戸惑いも見受けられ、文献を読むだけの課題では主体的学びにつながらないのではないかと

4

いう不安も抱いた。

そこで、第2回目の授業では、次のような課題を提示することとした。

- ① 「江戸時代の中山道板橋宿の歴史と文化」(板橋区教育委員会生涯学習課文化財係編『文化財シリーズ 第98集 板橋の歴史と史料―宿場の町並と文化財―』板橋区教育委員会、2017年)の指定されたページ(PP.13～25)を読む。
- ② 800字程度のレポート提出(①を読んで興味を持った部分の概要をまとめ、さらに調べを進めて、感想も述べる)。

興味を持った点に関する調べる課題を加えたことで、ある程度は主体的な学びにつながったと思われる。特に多くの学生の興味をそそいだのは、縁切り榎の存在であった。榎がたどってきた歴史、謂われ、



現代における信仰の様子など、学生によって榎を調べる観点は様々であったが、多くの学生がテーマに取り上げていた。ほかにも、加賀藩下屋敷、鷹狩り、特産の大根、舟渡遺跡などのテーマも人気があった。ただ、各地の図書館が閉館していたこともあり、情報源の大半はインターネットで得られる内容であった。板橋区のサイトなどできるだけ信用できる情報の利用を薦めたが、学生も課題に追われるなかで情報を探し、テーマによってはしかるべき情報を選び取ることが難しいという事情もあったようだ。

第3回目の授業では、次回からWEB授業を予定していたこと、また図書を入手できないなか提出物の質を担保できないことなどから、次の課題を課した。

- ①「江戸時代の中山道板橋宿の歴史と文化」(前掲『板橋の歴史と史料』)の指定されたページ(PP.28～33)、「明治以降の板橋宿」「宿場と文化」(同前書PP.35～41)を読む。
- ② ①とこれまで学んだことを踏まえて、板橋宿に関するクイズを3つ作成して提出する。クイズは、できるだけ他の人と重ならないような内容とすること。

クイズの問題と解答の提出は、連絡時にGoogleフォームのURLとパスワードを伝え、そこへ回答する方式をとった。その際は、授業への質問・意見についても受け付けた。クイズも、やはり縁切り榎に関するクイズが多かったが、飯盛り女、板橋宿内の三つの宿、本陣や脇本陣とそれを務めた家をテーマとするものも散見された。クイズを作成するために、例えば元田原藩医で板橋宿に住んでいた加藤曳尾庵に注目し、改めて文献を調べた学生もいた。その一方、かなり安易な問題を作成して済ませた学生も数名いた。これに限ったことではないが、学生の課題への向き合い方によって、教育的効果にかなりの差が生じてしまった感がある。

## (2) バーチャル・フィールドワーク「板橋宿跡を歩く」

第4回目の授業は、初めてZoomミーティングにてWEB授業を実施した。例年、学年の異なる学生同士がグループを作って課題に取り組んでおり、事前に学生同士の交流を深める必要があると考え、まずは前回の課題(板橋宿に関するクイズ)を使ったアイスブレイクを実施した。Zoomではブレイクアウトセッションを設定し、グループワークを行うことが可能である。自動設定にて任意の5～6名のグループを作成し、まずは自己紹介をした上で、各自が作成したクイズを出し合うこととした。

その上で、改めて授業の進め方、まだマニュアル等も配布されていなかったClassroomの使い方について、画面共有機能を利用しつつ説明を加えた。そして自宅から外出できないなかで、ここまで学んだ板橋宿の現況について、少しでも雰囲気を知ってもらいたいと思い作成したスライドの閲覧の仕方、閲覧後の課題についても説明した。

スライドは、Google Earthを使って作成したもので、同アプリのプレゼンテーション機能を使って閲覧するというものである。本学部の校舎を出発地として、現在でも板橋宿が板橋区の中心部であることを示すため、まずは板橋区役所へ移動した。その後、次の順番でスライドを作成した。

1年次の必修科目の授業で訪れたことがある板橋区公文書館、縁切り榎(ストリートビュー、以下Sと略す)、現代における板橋宿の板橋(S)、近代に巨大水車が設置された場所に近い緑道公園(S)、当該地域の鎮守氷川神社、同社の富士塚(S)、参道を通して同社の鳥居前(S)、脇本陣を務めた仲宿の飯田家跡(範囲をラインで示し[以下、Lと略す]、Sへ移動)、本陣を務めていた飯田家跡(L・S)、文殊院(L=現在の寺域)、高野長英ゆかりの地(杉村玄洞居所跡)、乗蓮寺跡(L、同寺については後述)、乗蓮寺の参道跡(L・S)、遍照寺跡(L・S)、板橋区観光センター、脇本陣を務めていた平尾の豊田家跡(L・S)、観明寺と庚申塔(S)、平尾追分、東光寺(S)、都立北園高等学校、加賀西公園、圧磨機圧輪祈念碑(S)、区内最古の公園である板谷公園(「東京市板谷公園」の看板がある門扉のS)、加賀藩前田家下屋敷跡、



図1 「浄蓮寺跡」を解説したスライド(「板橋宿跡を歩く」より)

下屋敷庭園の築山跡(登り口と頂上のS)、東京第二陸軍造兵廠板橋製造所跡、近藤勇の墓(S)、JR板橋駅を到着地とした。

各地点では史跡等に関する解説文を加え、板橋宿の有力者板橋家の菩提寺でもあった乗蓮寺については、過去の航空写真も添えた。乗蓮寺は国道17号線の拡幅工事に伴って、1973(昭和48)年に板橋区赤塚へ移動している。そのため、国土地理院で提供されている同地域の1961～69年の航空写真、1974～78年の航空写真をスライドにはめ込み、寺院の移動前後の様子を確認できるようにした(図1参照)。

閲覧後、学生はスライドの内容のうち特に興味を持った点を説明した上で、感想を寄せることとした。ここでは、スライドの内容に対する感想ではなく、スライドによるバーチャル・フィールドワークという手法に対する学生からの感想を紹介してみたい(以下、一部抜粋、文章は原文のまま)。

【スライドに対する学生の感想1】

- ・特に、逐一航空写真の表示に戻るところがよかった。歩くだけだと、あちらの方向に何がある、というのを頭の中で描きづらい。しかし、上から見渡すことで、それぞれの位置関係をはっきりと把握できる。中山道と、本陣などの建物の位置関係も一目でわかる。また、加賀藩下屋敷の広さについて、事前学習で読んだ資料に坪数が書かれていたが想像はできなかったのだが、Google earthに黄色い囲い線があったため、こんなに広がったのかと視覚的に確認できた。(3年次生)
  - ・実際にその土地に赴き自分の足で歩くフィールドワークとは違い、広い視野で土地を見ることができ、新鮮であった。鳥瞰することで、どれくらいの敷地面積を有しているのか、どのような地理的特徴があるのかなどふだんのフィールドワークとは違った視点でみることができた。(3年次生)
  - ・上空から確認することで、跡地の面積を周囲の建物の面積と比較することができ、その広さを視覚的に実感することができた。特に、本陣や脇本陣跡は周囲の民家と比較するとその広さが一目瞭然であった。スライドを通して位置関係や規模などを、具体的に把握することができた。(2年次生)
  - ・Google Earthでこういうことが出来るとは知らなかったので驚きました。板橋宿の板橋や氷川神社の富士塚など、いくつかの写真は360°写真だったので試しにVRゴーグルと組み合わせて見たところ、資料だけの場合よくある片側からしか映っていない写真では、全体や大きさが捉えづらかったり、道の幅や建物同士の距離感を測りづらかったりといった、通常は直接現地まで出張らなければ解決しない問題のほとんどが解決しました。多少の違和感は感じましたが、全く許容範囲の内でした。(3年次生)
- まだ、オンライン授業が開始されたばかりだったということもあってか、比較的好意的な感想が多かった。特に、Google Earthでは俯瞰的に景観を見ることが出来る点が、メリットとしてあげられて

6

いた。4番目の感想は、筆者が想定していなかったVRゴーグルを併用してスライドが活用されたケースである。

だが、好意的なものだけではなく、問題点を指摘する感想もあった(一部を抜粋、文章は原文のまま)。

#### 【スライドに対する学生の感想2】

- ・Google Earthのデータが重く、なかなかスムーズに観ることができなかった。
- ・目的地から次の目的地まで飛ばしてしまうため、道順や方向感覚がくるってしまうこともある。また、場所の雰囲気を感じ取ることができない。

このように、スライドのデータ量、移動距離の感覚を伝える必要性など、課題も残されている。ただ、実際に史跡等を歩く際の事前学習として、このようなスライドを活用し、巡見と組み合わせる方法は有効だと思われる。履修者の人数によっては、全員に向けて現地で説明することが難しい場合もある。反転学習の要領で、巡見の事前学習用としての利用もできるであろう。コロナ後の授業においても、活用方法を検討していきたい。

### (3) WEB授業

前述のように、第4回目からはZoomによるリアルタイムのWEB授業を実施した。ここでは、簡単に各回の授業内容を紹介した上で、WEB授業の有効性と課題を整理しておきたい。なお、資料配付や課題提出、連絡など、学生とのやり取りはGoogle Classroomを使用し、授業内のグループワークはZoomのブレイクアウトセッションを利用した。

#### 【第5回目 史料収集調査について学ぶ】

当初は、板橋区郷土資料館での文書調査を予定していた。だが今回は、実際に博物館・資料館や個人宅へ調査に行った場合を想定した、講義形式での説明に替えた。体験談等を交えつつ、事前調査の仕方、調査先への訪問時の注意点、調査の方法、調査後の調査先へのお礼、目録作成や資料翻刻と紹介の仕方など、一連の行程を具体的に説明した<sup>6</sup>。その上で、各地にある資料ネットワークの活動を紹介し、各学生の地元にある資料ネットワークや、興味のある資料ネットワークの活動を調べ、報告することとした。

#### 【第6回目 報告書の書き方について学ぶ】

グループワークの成果を報告書としてまとめるにあたり、各自の提出する文書の体裁を整える必要があったため、指定の様式とルールでレポートを提出する機会を作った。指定の様式とルールとは、本学部の卒業論文と同じものである。史料や文献の引用の仕方、注の付け方などを身に付ける意味がある。レポートの課題は、板橋区徳丸の北野神社、赤塚の諏訪神社で行われている「田遊び」の動画を鑑賞し、さらに調べた成果をまとめるというものである。

しかし、課題の提出時に、Wordのフリーソフトしか利用できない学生がおり、指定の様式やルールに対応できないことが判明した。大学のPCを利用して報告書を作成していた昨年までの授業では、問題にならなかった点である。そのため本年度は、当初予定していた様式やルールとは、異なる規定で提出することとした。

#### 【第7・8回目 古文書の読解】

第7回目に、取り扱いに注意が必要であることを説明した上で、昨年度に撮影した「伊勢孫文書」の写真を配布した。第7回目は、各学生が担当を割り振られた史料の写真を使って読解し、第8回目は同じ史料を担当する学生のグループで、互いに協力しつつ翻刻に挑んだ。事後学習課題として、配付した史料翻刻のお手本を見ながら、各自の翻刻を確認し、訂正を加えた上で提出することとした。



【第9・10回目 史料内容の分析】

文書調査ができなかったため、既に翻刻された史料を使って板橋宿について考察し、報告書にまとめることにした。使用したのは、『板橋宿の歴史と史料』（前掲）に掲載されている史料である。まず、11のグループに分けて、各グループが担当する史料を決めた。課題は、史料を読んで大意をとり、考察を加えるというものである。第9回目は個人で、第10回目はグループで課題に臨んだ。

【第11・12回目 報告書の作成】

第11回目は、まずグループごとに分かれて報告書の構成を考え、それぞれの担当を決めてから各自の作業を進めた。第12回目の授業までに、各自が担当して作成したレジュメを、グループで1つにまとめ直すこととした。レジュメを見て現状を把握し、各自の役割を再確認して報告書作りを進め、提出した。

【第13～15回目 ポスター発表とプレゼンテーション】

これまでの学びを通して、各自が板橋宿をテーマとするポスターを作成し、それをういたプレゼンテーションを実施した。第13回目は各自がポスターを作成し、第14回目は各グループ内でポスターの発表とプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションでは、PCを使って参加している学生は自ら画面共有することでポスターを掲示し、スマートフォンなどで参加する学生は、PCで参加する学生の協力を得て、ポスターを掲示してもらい、発表した。その際、各グループから代表1名を選抜してもらい、第15回目にはグループの代表者11名が全員の前で発表した。代表以外の学生は、ポスター発表やプレゼンテーションを視聴するだけでなく、最後にGoogleフォームを使った投票に参加した。ポスターの出来、プレゼンテーション、それぞれについて投票を行い、1名ずつ2名の学生が選考された。

なお、ポスター作成課題をClassroomに掲示する際には、事前にClassroom上で作成したルーブリックで評価方法を明示した。ポスター提出後は、ルーブリックを使って個々のポスターに評価を加えて返却した。評価項目は、様式が正しいか、『板橋の歴史と史料』を引用しているか、グループワークで読んだ史料が引用されているか、授業内容を理解しているか、ポスターの目的と内容が明確か、創意工夫が見られるか、である。

WEB授業の内容は、以上の通りである。オンライン授業では、指定されたり配付されたりした動画やスライドを各自のペースで観ることができる。また、各学生が任意のデバイスを使って、学生のペースで課題に取り組み、画面共有によってグループで話し合いをし、グループでGoogleドキュメントの同時編集を行えるなどのメリットもある。しかし、本授業においてはデメリットの方が多かった。以下、本授業で明確となった問題点をいくつか挙げ、不十分ながら対応できたことがあれば指摘しておきたい。

【WEB授業におけるデメリット（本授業の場合）】

- ① 初対面の相手と対応することが難しい。学年が異なる、または普段交流のない学生同士では、対面での授業以上にやりとりが難しいようだった。授業開始時にはアイスブレイクを行うなど、学生同士が交流できる場を設けるよう努めたが、画面越しで伝わる情報量には限りがある。そのため今年度については、同じ学年同士で既知の間柄、比較的連絡が取りやすいと思われる学生を一緒にグループにした。それにともなって、グループ分けでは次の点も考慮した。史料の読解力は、2年次生と3年次生ではやはり差がある。そのため、2年次生と3年次生のグループによって、担当する史料の難易度や長さ、グループの人数を変えることとした。
- ② グループワークの巡回にも難しさを感じた。教員が各グループのブレイクアウトセッションに参加し、進捗状況を確認したり、質問等に応じたりしていた。だが、想定していたよりも履修人数が多かったこともあり、11ものグループでは個々の滞在時間は限られ、充分に対応できなかった。



また、あるグループは、久しぶりに友人と出会えたためか、教員がグループに参加するまでしばらくおしゃべりで盛り上がってしまい、事後学習に費やす時間が増えてしまうこともあった。

ただ、教室でのグループワークの巡回よりも、良かったと思われる面もある。教室での対面授業では、グループを巡回した際には、リーダーを務める学生とのやり取りが中心であった。それに対して、オンラインでは同時に複数の学生と等距離でやり取りでき、個々への対応という意味では対面授業よりも丁寧であったと言える。だが一方で、同時に複数グループの話聞き、対応することはオンラインでは難しかった。

- ③ 学生同士のコミュニケーションにも難があった。通常ならば授業以外の場で顔を合わせ、情報交換や文書データのやり取りができるのに対して、授業時間以外での交流がほぼなく、コミュニケーションをとることが難しいグループもあった。グループによっては、ClassroomやLINEなどのツールを使ってやり取りしていたが、一方ではグループワークを行う授業回に欠席し、学生からの連絡にも応じない学生に困惑するケースもあった。もっとも今回は後者のケースも、やむを得ない事情による欠席であったことが判明し、教員が介在しながら学生相互のコミュニケーションをとることで、最終的には事なきを得た。
- ④ 上記のことと関わって、リーダーシップをとる学生の負担が通常よりも増加していたと思われる。オンライン授業は、個々の学びに向いている点が多く、グループワークのやり方については、さらなる工夫を重ねていく必要がある。
- ⑤ 学生によって、授業に臨む際の環境がさまざまである点も、対応に苦慮した。PCが家がない学生もあり、スマートフォンのみで文書やポスター作成を行うのは大変であったと思われる。また、前述のように学生によって使用するソフト（Wordの無料版か有料版かなど）も異なっていた。そのため、全体に向けた説明が難しく、個々の状況に応じて対応せざるを得ない事柄も多かった<sup>7</sup>。

### 3 学生の研究成果 — 報告書とポスター発表 —

従来授業における成果物は、グループで作成した報告書のみであった。だが、前述のようにWEB授業ではグループワークが難しく、個々の作業の方が向いていると思われた。そこで個々のワークの時間と成果物を増やし、ポスター発表とプレゼンテーションを実施することにした。次に、報告書とポスター発表の概要を述べた上で、その教育的効果と課題を考えてみたい。

#### (1) 報告書

11のグループごとに提出したレポートを1つにまとめた。目次は次の通りである。

##### 【報告書の目次】

1班 古町百姓連印による嘆願書から見える実態 (石塚涼花・伊藤漱汰・岡村七海子・栗原文・清水青空) .....	1
2班 古町困窮者たちの嘆願書 (小山智由・鈴木拓弥・田積海人・谷村実風・日高洋佑) .....	3
3班 「享保九年 古町百姓連判の嘆願書」を読んで (村松華奏・吉澤綾子・吉田光宏・米田陸人) .....	7
4班 壬申紀行と中山道 (藍原淳・石崎航平・岩田龍平・及川大輝・大月汰一・笠原佳寿馬) .....	9

5班 旅人(片山秀政・榊原大和・河野達哉・佐野天裕・小林竜崎・神明朋也) ……………	11
6班 「越年使役日記」を読んで (佐藤歩・高野和哉・高橋兼征・高柳岳斗・高山雄太郎・武田美咲) ……………	13
7班 「秀栄独語」の考察 (多屋竜太郎・趙言午尊・筒井勇樹・寺地仁生・傳法伸大・中村大地) ……………	17
8班 「島根のすさみ」天保十一年(一八四〇)を読んで (月村空羽・西村克哉・二之宮由唯・林陽南子・春山佳凜・藤原大和) ……………	21
9班 「道中案内・地誌などに書かれた板橋宿」を読んで (本間瞭汰・前武當縁・間宮直樹・柳沢颯人・山下怜司・吉原葵) ……………	24
10班 「安永二年(一七七三)二月 板橋宿困窮の助成のため板橋宿旅籠屋の者どもへ、音羽町にて 茶屋商売仰せ付け願ひ」を読んで (渡邊魁崇・秋葉大和・奥雲拓徳・落合一暁・鈴木陵太・高橋和志) ……………	28
11班 史料28「安永四年閏十二月 板橋架け替えのため仕様ならびに見積の儀につき一札」に関する 研究(水落優生・久保夏音・竹田清華・平子健士郎・飯塚奏菜) ……………	30

各班の報告内容は、既に述べたように史料の大意と考察である。考察にあたっては、史料のどの部分から何を指摘できるかを説明することとした。だが、9班などは、史料中に見える鹿狩りや荒川の渡船、街道筋の遊郭に関する先行研究にも触れるなど、担当する史料を素材にしてさらに考察を深めていた。一方、史料の大意を取ることが難しく、十分な考察に至らなかったケースもあった。グループによっては、学生の史料読解力と史料の内容に落差があり、サポートが必要であったと反省している<sup>8</sup>。

## (2) ポスター発表

ポスターは、A4用紙(縦)1枚で、WordもしくはGoogleドキュメントで作成の上、PDFに変換して提出した。内容は、板橋宿の特色や魅力を伝えることを目的とするものとした。具体的には、『板橋の歴史と史料』(前掲)を参照し、グループワークで担当した史料を引用すること、ループリック(前述)の評価方法をよく見て作成することとした。次に、学生からの投票で得票数の多かったポスターを掲げる。

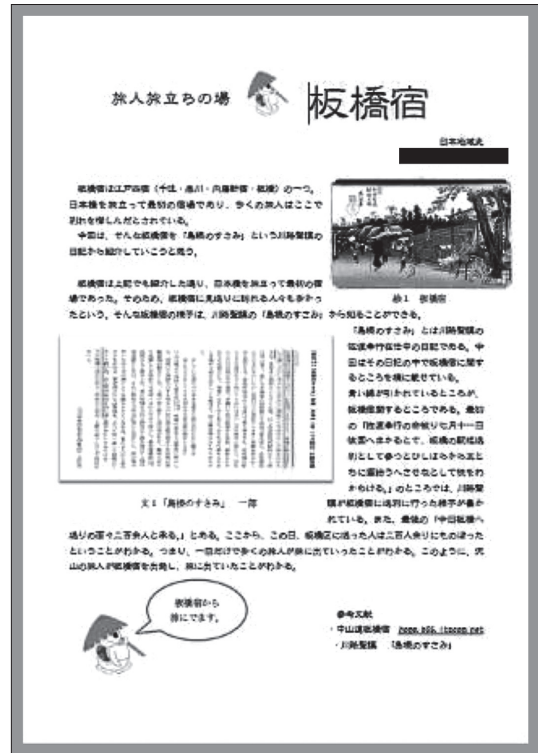
A「板橋宿本陣が置かれた中宿は、繁栄していたか?」は、下段で「飯田家文書」に見える平尾宿の繁栄について紹介し、上段で「板橋宿略画図」(『板橋の歴史と史料』所収)を使って3宿の説明を加えている。B「旅人旅立ちの場 板橋宿」は、史料として「島根のすさみ」を引用して板橋宿での送別の様子を紹介している。C「板橋 江戸から現在へ 続く架け替え」では、『江戸名所図会』にある江戸時代の板橋と、板橋架け替えに関する史料、近代以降の橋の架け替えの歴史を紹介し、現在に至るまでの経緯を説明している。D「板橋と鹿狩りについて」は、国立歴史民俗博物館所蔵の「江戸図屏風」に描かれた板橋における鹿狩りの様子を紹介しつつ、将軍の鹿狩りと板橋宿の関係について説明している。

学生の投票では、デザイン性の高さ、ストーリー性、伝わりやすさ、インパクトの強さが主に注目されていたことがうかがえた。文字が多すぎず、テーマが絞れていることも重要だったようだ。ここに紹介した以外にも力作は多かった。ただ、外出自粛で学内の施設が使えないなど、コロナ禍の混乱が続くなかで、PCを利用できる状況にあるか否か、Wordなどのソフトをある程度使いこなせるか否か、といった学生が置かれた環境や学生の技術的な力量によって、ポスターの内容にも差が生じてしまったと思われる。



A

「板橋宿本陣が置かれた中宿は、繁盛していたか？」



B

「旅人旅立ちの場 板橋宿」



C

「板橋 江戸から現在へ 続く架け替え」



D

「板橋と鹿狩りについて」



## おわりに

ここまで、コロナ禍において急遽実施することとなったオンライン授業の一事例を紹介してきた。オンライン授業に関わる技術的な側面は日々進化しており、ここで紹介する意味はあまりないと思われる。そのため技術的な工夫については、ほとんど言及してこなかった。本稿はあくまでも、社会状況や大学の方針がめまぐるしく変わるなか、その時々を利用できるツールを探し、学生の意見を聞きながら対応を考え、進めてきたある授業の記録に過ぎない。しかし、そのような記録を残すことも、後には歴史的な意味を少しは持つかもしれないと考える。そのため本稿には、本学や本学部にとってやや不都合かもしれない内容も記すこととした。それらも含めて、2020年のコロナ禍の記録と言えらると思うからである。

最後に、本授業の教育的効果についてである。論文などの文献の読解、史料の翻刻や分析、報告書やポスター作りといった授業内容においては、個々の学生の力がある程度は伸ばすことができたと思われる。ただ、画面越しで行ったプレゼンテーションは、相手の顔がほとんど見えず、反応も読み取れないなど、対面とは条件が大きく異なり、人前でのプレゼンテーションにはあまり役に立たないかもしれない。だが、今後はオンラインでのプレゼンテーションの場も増えると思われ、一定度の効果はあったのではないだろうか。しかし、最も残念だったのは、史料調査の方法を身に付けることができなかつたことである。三脚を立て、一眼レフカメラを水平に設置し、史料を広げ、ピントを合わせて撮影する、といった一連の動作を講義形式の授業で説明しても充分には伝わらない。実際に体験することは重要であろう。本授業では文書調査は必須の内容ではないが、他の開講授業との兼ね合いを考えても、史料調査を体験する機会はあった方が良くと思われる。どのような対応策があるのか、検討していく必要がある。

課題の多いオンライン授業ではあるが、既に指摘したようにメリットもいくつかあった。ただ、それらのメリットを感じることができたのも、学生の授業出席率がたいへん高く、学生から多くの協力や意見を得られたお陰だと考えている。このような授業作りに協力してくれた学生たちに感謝しつつ、オンライン授業で有効性を確認できた手法を取り入れて、今後も有意義な授業ができるよう努めていきたい。

## 注

- 1 結局、前学期の授業は基本的にすべて遠隔で実施された。
- 2 本学の他キャンパスでは、全教員・全学生にGoogleアカウントは付与されていた。
- 3 一方で、学生からは課題の掲示方法と提出先が教員によって異なるため、混乱するとの声も多く聞かれた。本年度後学期においては、課題掲示及び提出先がClassroomに統一されたことで、この点は改善されている。
- 4 第1回目の授業から、Googleフォームで各授業用に問い合わせ先を作成した。履修学生にはURLとパスワードを伝え、質問や意見を受け付けていた。
- 5 2020年度前学期の授業では、3・4年次生の演習、1年次生の必修科目、教職科目の必修授業については、初回からZoomミーティングを利用したWEB授業を実施した。本学部では、原則的に課題提示型授業を推奨されているものと判断されたため、当初は一部ではWEB授業を実施しなかった。なお、この段階では、Google Meetにグループを作る機能は設定されていなかった。
- 6 デジタルカメラによる文書資料の撮影については、佐藤大介編・NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク発行「歴史資料保全活動におけるデジタルカメラによる文書資料撮影の手引き」などを使用した。
- 7 このような状況への対応策として、後学期の授業では無料で使用できるGoogleドキュメントを基本的に使用している。また、現在は学内でのPC利用も再開されている。
- 8 後学期はこの反省を活かして、Classroom上でコメントを付ける機能を利用し、頻繁にやり取りすることで学生をフォローしている。